

# 東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2024

## 「はつらつと生きる ～大学は知の宝庫～」

第5回 11/22 (金) 13:30～15:00 報告

文化は「沈黙のことば」

講師 アンドリュー・デュアー (本学教授) 於：図書館大セミナー室

\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*◆◆◆\*

令和6年度第5回公開講座(受講者40名)が11月22日に本学図書館大セミナー室で開催されました。

図書館長で東海第一幼稚園園長先生でもある、管理栄養学科教授のアンドリュー・デュアー先生は、異文化コミュニケーションなど多くの授業を御担当されています。司書教諭の資格者も育てておられ、紙飛行機やペーパークラフトなどに関する多くの著書も執筆されています。また、多くの委員長等も歴任され、文部科学省の子どもの読書推進計画の策定にも関わっておられ、幅広い分野でご活躍をされています。

今回の「文化は“沈黙のことば”」と題された講演では、メッセージやコミュニケーションについて、幅広い「文化」という視点からお話下さいました。日常生活のあらゆる面に表出される私たちの文化は、無意識のうちに周囲の人にいろいろなメッセージを送っています。そういったことを「文化を考える時、何を思い浮かべるでしょうか？」など、様々に問いかけを下さいながら、多くの文献をご紹介下さり、考えさせて下さいました。

普段、自分の文化を意識することはあまりありません。文化はどこにでもある存在であり、本能的行動以外の全ての行動は文化と言っても過言ではありません。例えば、寝るという行動は本能ですが、日本ではお布団で寝ますが、海外ではハンモックで寝たり、ベルサイユ宮殿のような黄金の中で眠ったりする人もいます。食べるという行動に関しても、食材・調理法・作法など、食べ方や道具などが違うと不安や違和感が生じる場合もあります。麺類の食べ方も不快な音に聞こえるか美味しそうに聞こえるか、習った文化で違います。

文化を作ること自体が、人間の本能の1つですが、高度な知能を持っている動物の多くにも、文化があります。シャチはそれぞれに名前があり呼んでいるそうです。インコには方言があり年寄りのインコは新しい方言を覚えて集団に溶け込むことが困難だそうです。

お箸で食べる・日本語を話す・お祭りに参加する・お寿司が好き・歌舞伎を観るなど、私たちの行動は、親と仲間から学習した行動であり、これは文化の1つです。文化は周囲の社会を真似して学習するものでもありますが、それは仲間との絆を作るためであったり、社会の摩擦を避けるためであったりするため、様々に進化をしています。

文化人類学者のマーガレット・ミードは、「文化とは親たちから子どもたちへと伝えら

れる学習された行動の体系的相対」であると示しており、文化は家庭から始まり、真似ることから始まると言っています。

一方、心理学者のジュディス・リッチ・ハリス（「子育ての大誤解」）とスティーブン・ピンカー（「心の仕組み」等）は、子どもは1人で行動できるようになれば、親よりも関わりが大きくなった仲間の方が気になり、その影響の方が大きくなると、示しています。

例えば、子どもは友だちの趣味に惹かれ、友だちの価値観を優先していきます。グループ内での言葉や訛りを身につけたり、みんなと同じスタイルで行動しようとします。社会に違和感なく浸透できるように、仲間に溶け込めるよう行動します。それは、他人と自分の文化が似ているほど、人間関係は調和するし親近感が湧いてくるからとも言えます。

文化人類学者のエドワード・T.ホールは、著書『沈黙のことば』で、文化の持つ重要性を説き、異文化の人同士が理解しコミュニケーションできる方法を記しています。

1つ目は、「プロクセミックス」（近接論）で、「密接距離」「個体距離」「社会距離」「公衆距離」の4段階を示しています。例えば、距離感は文化によって違い、パーソナルスペースの感じ方によっては、近すぎると距離を取るが、それを冷たく感じる人も居るというように、隠れた次元としての文化にも関わってきます。

2つ目に、「ハイコンテキスト文化とローコンテキスト文化」という識別法に言及しています。「コンテキスト」とはコミュニケーションの基盤である「言語・共通の知識・体験・価値観・ロジック・嗜好性」などのことで、この識別により、国や地域のコミュニケーションスタイルの特長が理解しやすくなります。

例えば、日本では、コンテキストが主に共有時間や体験に基づいて形成される傾向が強く、「同じ釜のメシを食った」仲間同士ではツーカーで気持ちが通じ合うなど、日本では言葉のみではなく、あらゆる情報を背景にお互いに相手の意図を察し、コンテキストに頼った意思疎通を子どもの頃からしています。本音と建て前などもこれに当たります。

一方、欧米などのローコンテキスト文化では、コンテキストに依存せず、言語によるコミュニケーションを図ろうとします。そのため、言語に対し高い価値と積極的な姿勢を示し、コミュニケーションに関する諸能力（論理的思考力、表現力、説明能力、ディベート力、説得力、交渉力）が重要視されます。例えば、ホットコーヒーをこぼした際に火傷をした場合、「ホット」と言わなかったなどで、裁判で争うことも見られます。

3つ目が、すべての文化が扱っている普遍的な生活にある10の要素（相互作用・連携・生計・両性性・領域性・時間性・学習・遊び・防衛・開発）です。これらの要素を、自分の文化がどのように周囲の人にメッセージを伝えているか、周囲の人の要素から、自分はどのように無意識に理解しようとしているかを考えることは重要です。例えば、本日、講座のお土産に選んでもらった携帯ティッシュ入れには、お土産を喜んでもらいたい文化・パッケージを綺麗にしたい文化、何故この柄にしたのか、など様々があります。

日本と海外での電車の遅れに対する人々の感情の違いや、家の周りに塀を作る国とオー

プンな国の違い、相手の人への接し方の違い、しぐさや話をするときの距離、全てが文化で言葉によらないコミュニケーションです。

私たちの文化は、良いことでも、悪いことでも、他人にたくさんの情報を伝えており、それはある種のコミュニケーションとも言えますが、異文化同士が会合うときに、そのメッセージがうまく伝わらなく、誤解につながる場合があります。違う文化の人が関わるとウクライナの戦争など政治的な争いにも発展することもあります。

何を意識すれば世界の人と仲良くできるか深く考えさせられる御講義でした。

講義後のご質問には、「オンラインについての注意点」「本能的行動と文化の違い」についてなど、数多くの質問が出て時間後も先生のお時間が許す限りお答えくださいました。

御講座を拝聴できまして、何故自分はこの行動をしているのだろうか？など、多くを考え、「はつらつと生きる」ためにも、言葉以外の文化からも、自分自身のメッセージも大切にしたいと考え、異文化も含めて全く違う価値観など多くに触れ、体験し、自身をもっと広げたいと思いました。人生にとって多くのご教示を下さりありがとうございました！

#### 【講座の様子】

